

スーホの白い馬（大塚勇三 再話 赤羽末吉 絵）

むかし、モンゴルの草原に住むひつじ飼いの少年スーホは、ある日傷ついた白馬を助けて育てました。白馬は大きくたくましく育って、ある日スーホと一緒に町の王様の元で開かれた競馬に出場しました。競馬に勝った若者をおおさまの娘の婿にするというのです。

競馬がはじまりました。国じゅうから集まった若者たちはいっせにかけだしました。けれども勝ったのはスーホです。スーホを乗せた白馬です。ところが、おうさまはまずしいスーホを見て約束はほごにして、白馬は取り上げてしまいました。家にかえったスーホは白馬のことばかり考えて、どうしても悲しみは消えません。ある日そんなスーホのところに傷ついた白馬が帰ってきました。白馬は悪いおうさまのところから逃げ帰ってきたのです。やがてスーホに抱かれて白馬は死んでしまいました。スーホは白馬に教えられて通り、白馬の身体の筋や革から馬頭琴を作り、それをモンドルの草原に広げていきました。

ロシアのバラライカやモンゴルの馬頭琴、それらには中央アジアやロシアの大地の草原の広々とした風や空気のようなものが感じられます。この絵本にはそんなモンゴルの大地の匂いを伝えるために、色々な仕掛けがあります。例えばひとつひとつの絵が、幅ひろの見開きで描かれていて、まるで絵巻きものようです。それから登場人物や動物たち、さらにバックの山や町の色と形からは主人公の嬉しい気持ち、激しい気持ち、悲しい気持ちが伝わってくるのです。

